

資料館だより

第 11 号

平成元年 3 月 20 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市本町5-21-1 TEL 0425(60)6620



市史跡「三本榎」（昭和56年）

（左：加藤榎、右：乙幡榎）

市史跡「三本榎」の歴史とその保護

1. はじめに

昭和50年、武蔵村山市の花は「茶の花」、市の木は「榎」と制定された。市の花は特産品の狭山茶に由来しており、市の木については市域のほぼ中央にその雄姿を誇っている「三本榎」に由来している。それほど三本榎は市のシンボルとして親しまれており、昭和51年には市史跡に指定された。

三本榎はその名のとおり西から順に乙幡榎、加藤榎、奥住榎と呼ばれる三本の榎の総称である。奥住榎は大正時代の末頃に植え代えられており、やや小さい。乙

幡榎、加藤榎はそれぞれ幹回りが3m60cm、4m60cmもある巨木である。

ところが、昭和60年以降、病虫害や度重なる太枝の折落により、威容を誇っていた三本榎も樹勢の衰えが指摘されていた。これを受けて市教育委員会では早急に保護対策を講ずるべく調査を進め、本年1月に根本的な「回復手術」を施すことになった。については、今号において三本榎を特集し、その歴史と「回復手術」の内容を紹介する。

2. 三本榎の歴史

まず、三本榎の所在地は、次のとおりである。

- 乙幡榎……武蔵村山市榎三丁目5番地の1
- 加藤榎…… “ 学園一丁目2番地の3
- 奥住榎…… “ 学園一丁目5番地の7

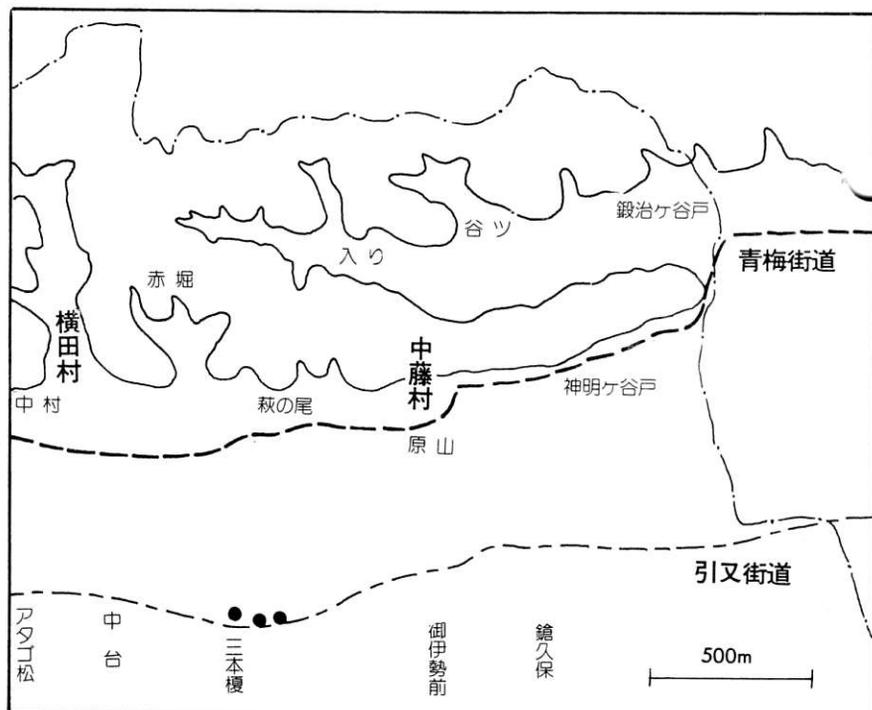
なお、旧来の字名でいえば、三本とも大字中藤字三本榎となる。

三本榎の植えられた由来については、その樹齢と共にはっきりしないが、1つの伝説がある。それは『昔、腕自慢の三人の若武者が赤堀の山際から遠矢の競争をした。そして、放った矢が落ちた場所に自分の姓をつけた榎を植えた』というものである。乙幡、加藤、奥住という姓は市内萩の尾地区に多く、しかも三本榎の所在地も萩の尾地区の人々によって開発された土地であり、強い関連がうかがわれる。

次に市史跡に指定された理由は、引又街道との歴史的な関係である。三本榎の南側を通る引又街道は、別名市街道とも呼ばれ、江戸時代に栄えた新河岸川の舟運の中継地であった引又河岸（現志木市）と青梅方面を結ぶ物資の輸送路であった。その重要な街道の脇に塚をつくって植えられた榎は旅人に格好の休息場を提供し、また当時の中藤村の目印にも

なっていたのである。

ところで、中藤村の最古の検地帳は寛文九年（1669年）の中藤村新田検地帳であるが、そこに記されている字名をみると「あたご松」、「中台」、「榎」、「御伊勢前」、「鎗久保」となっている。第1図と比較すれば、「三本榎」と「榎」という字名を除けば西から順に並んでいることがわかる。つまり、寛文九年の時点では「三本榎」という字名はなく「榎」と呼ばれていたことになる。寛文十二年（1672年）の検地帳にも「榎」



第1図 明治時代初期の中藤村

の記載があり、榎の植樹は少なくとも寛文十二年以降と思われる。参考までに今までに折れた三本の太枝の年輪をみると、乙幡榎、加藤榎のどちらの枝も約130であり、主幹の年輪もさほど多くはないようである。

以上が三本榎の歴史についての概要であるが、まだ三本榎が植えられた目的など不明な点が多く、今後の調査の必要が痛感される。

3. 三本榎の回復手術

三本榎の被害の経過とその対応を箇条書きすると、
昭和60年6月 病虫害が原因と思われる「白い斑点」が乙幡・加藤榎の幹に多量に発生。
昭和61年3月 乙幡榎西側の枝が雪の重みで折れる。折損部に腐敗防止のためモルタルを塗る。
昭和61年6月 乙幡榎・加藤榎に活性剤（メネデル）を注入。
昭和63年4月 加藤榎東側の枝が雪の重みで折れる。枝の撤去と共に、危険防止のため道路側に延びる太枝2本を切断。
また、乙幡・加藤両榎の保護対策について専門家（東京都農業試験場五日市林業分場研究員 土屋氏）に調査依頼。
昭和63年10月 加藤榎北東側の枝が強風にあおられて折れる。
昭和63年11月 日本樹木保護協会山野氏に三本榎の保護対策について意見を聞く。
平成元年1月 三本榎の保護管理工事を実施。

以上であるが、度重なる太枝の落折は木の衰弱に起因しており、自動車の排気ガスや振動、雨水の浸透なども影響している。対応策について専門家の意見はほぼ一致しており、枯れ枝の除去と枝の間引きを行い、重量の軽減を図ること及び幹の腐朽部分を削り取り補強することである。

実際の作業は、過去に約千本もの樹木の保護を手掛けた日本樹木保護協会山野氏の陣頭指揮で行われた。以下その内容を略述する。

(1) 枝の伐採（写真1）

乙幡榎、加藤榎ともに枯れ枝の除去と枝の間引きを行う。加藤榎については道路の安全対策上、大幅に枝の伐採をする。切断部は殺菌消毒後、防腐処置を行う。

(2) 腐朽部分の削り取り（写真2）

主幹及び太枝の腐朽部分を削り取り、殺菌消毒後、防腐処置を施す。



写真1 枝の伐採（乙幡榎）



写真2 腐朽部分の削り取り（加藤榎）



写真3 削り取り部の補強（乙幡榎）

(3) 削り取り部の補強 (写真3)

主幹及び太枝の腐朽部を取り除いた後、その部分に鉄筋及びラス(網)を張り、その上にモルタルを塗る。直接モルタルを塗ると切断部との間にすき間ができ、腐朽の原因となる。

以上のような方法で三本榎の保護を図ったのであるが、これらは直接木に施した、いわば「手術」に相当するものである。今後の養生としては、養分の補給(施

肥)や付着した煤の除去等を行う必要がある。日本全国でも榎の老木は数が少ないということで、長命な木ではないようである。しかし、加藤榎などは痛々しい姿になってしまったが、貴重な文化遺産として、また武蔵村山市のシンボルとして、少しでも永く三本榎を後世に残していきたいものである。

最後になったが、三本榎の歴史について市文化財専門委員乙幡泉氏に御教示いただいたことに御礼申し上げたい。



写真4 昭和30年代の三本榎

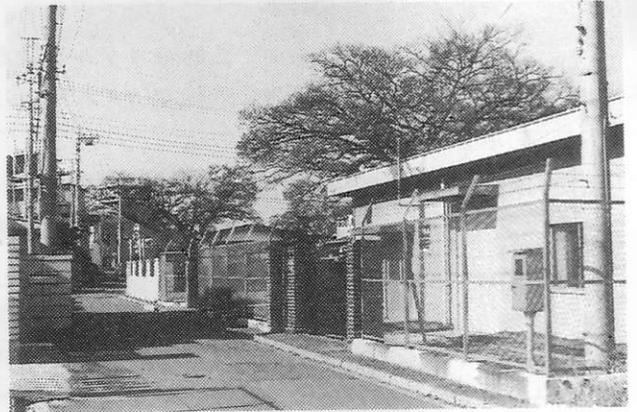


写真5 昭和62年の三本榎

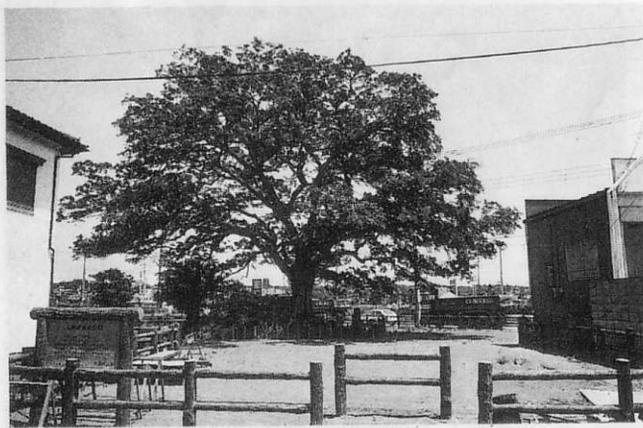


写真6 元気な頃の乙幡榎



写真7 回復手術後の乙幡榎

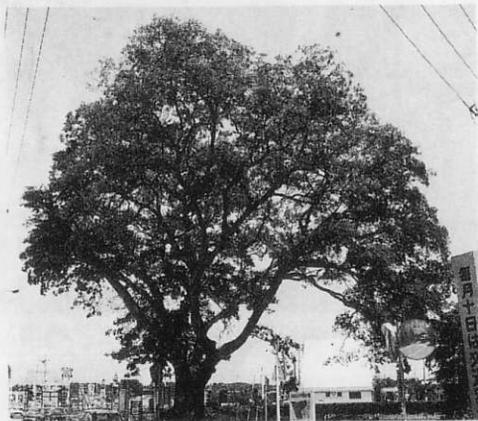


写真8 元気な頃の加藤榎

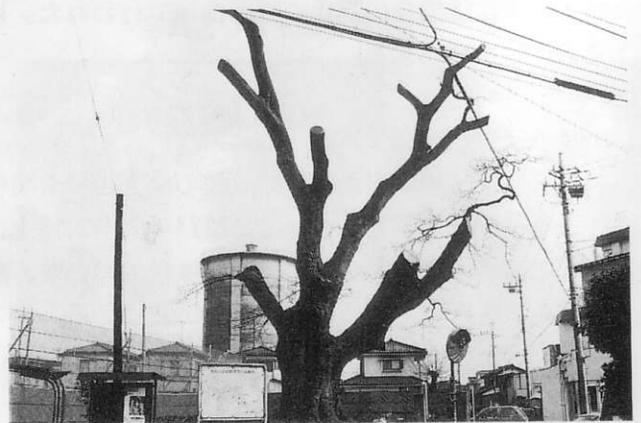


写真9 回復手術後の加藤榎

民俗コーナー「萩赤重松囃子」

武蔵村山市には市技芸に指定されている「宿葉師念しゆくやくしねん 伝でんはりはり」、ふうかね「三ツ木天王様祇園ぎんばやしよこなかば」、よこなかば「横中馬よこなかば 獅子舞ししまい」、はぎあかじゆうまつばやし「萩赤重松囃子」の四件の郷土芸能があります。これらの郷土芸能は五穀豊穰ごこくほうじょうや悪疫退散あくえきたいさんの願いが込められていたり、農村の数少ない娯楽の場を提供してくれたもので、地域と密接に結びついた貴重な無形民俗文化財である。

しかし、地域の人々のたゆまぬ努力により伝承されてきたこれらの郷土芸能も近年、後継者の育成が大き

な課題となっている。なかでも、「萩赤重松囃子」は、保存会の方々の鋭意えいいの努力にもかかわらず、後継者の問題は深刻で、記録の作成が急務となっていた。

歴史民俗資料館では、こうした状況を踏まえ、「萩赤重松囃子」のビデオテープによる映像での記録化を行い、後生への保存を図ることになった。そこで、今回の文化財アラカルトに「萩赤重松囃子」を紹介し、貴重な郷土の文化財に対する理解を深めていただければ幸いである。

重松流祭囃子

重松流祭囃子は所沢在住の古谷重松により江戸時代末期から明治時代初期にかけてあみ出されたもので、所沢市を中心に周辺の市町村にも多くの囃子連が存在している。古谷重松は染料に使う藍玉あいだまの行商をしながら各地で乞われて囃子の指導に当たったといわれ、泊まり込みでの稽古も行われたようである。

重松流祭囃子沿革史（重松流祭囃子保存会発行）によれば、竹笛、大太鼓（長胴）、小太鼓しめだいこ（締太鼓）、

かね 鉦、ひょうしぎ 拍子木の鳴物なりものを使い、神社の祭礼の時に山車だしの上で演奏される。曲目には屋台囃子みやしやうでん、宮昇殿みやしょうでん、四方殿しほうでん、かまくらかまくら、師調目しちようめ、三番叟さんぱんそう、にんばの7曲があり、獅子し、白狐びやつて、下男げなん、三番叟、おかめ、ひょっとこの面をつけた踊りが挿入される。また、この囃子の特徴は2つの小太鼓のからみであり、「地囃子じばやし」としての基本的なたたき方はあるが、即興的に変奏するのが妙味であるという。伝承はすべて口伝くでんで行われる。

萩赤重松囃子

市内萩の尾、赤堀地区に伝承される重松流の囃子で萩の尾、赤堀の頭文字を取り「萩赤重松囃子」と称される。明治17年頃、農民達の娯楽として古谷重松より直伝されたと伝えられる。伝承によれば、「重松は年齢50～60歳くらいで、頭にちょんまげゆを結っており、いつもキセルでたばこすを喫っていた。稽古の時に弟子がうまく笛を吹けないと喫っていたキセルで指をピンシャリとたたいた」とのことで、その風貌と厳しい指導ぶりがうかがわれる。

その後、日露戦争当時の楽隊の流行に伴い衰退し、昭和初期に一旦は伝承が途絶えてしまった。しかし、昭和29年、清水元治氏（現保存会会長）が東大和市高木、瑞穂町石畑の囃子連から教えを受けたことを契機に地元の有志により重松囃子は再興され、現在まで伝承されてきた。

囃子に使用される鳴物しのぶえは七孔の篠笛が1つ、「オオ



写真1 萩赤重松囃子

カン」と呼ばれる大太鼓が1つ、締太鼓（小太鼓）2つ、「ヨスケ」と呼ばれる鉦が1つ、拍子木1つで構成されている。演奏される曲目は所沢に伝わる重松流祭囃子と比較しても三番叟は無いものの第1表に示し

たようにほぼ基本的な曲は揃っている。踊りについても第1表に示すとおり、曲によって面が変わる。曲の進行は定まった決まりはなく、笛のリードで展開していくが、始まりと終わりには囃子がくるようにしているということである。

笛の吹き方や太鼓のたたき方の伝承はすべて口伝で行われ、笛の場合には「オヒヤラヒヤライー ヒヤーロ ヒヤーロ トロトビューヒヤロ」、小太鼓の場合には「テンチキ テンチキ チッチッチ コーリヤ」（以上宮昇殿）という具合にそれぞれの楽器ごとに文句を覚えて稽古が行われる。

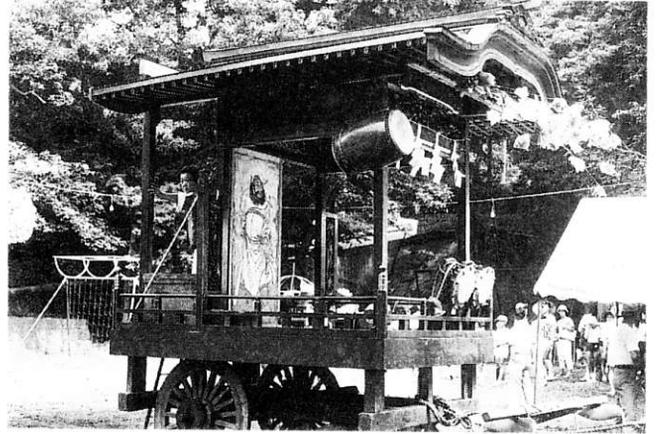


写真2 萩赤重松囃子の山車

区分 番号	曲 目	踊 り	鳴 物	備 考
1	囃 子	白狐または獅子		
2	宮 昇 殿			
3	四 方 殿		大 太 鼓 1	
4	かま くら		締 太 鼓 1	
5	師 調 目	下男(外道)	鉦 1	
6	に ん ば	バカ面(オカメ・ヒョットコ)	拍子木 1	興にのるとバカ面の足踊り

萩赤重松囃子保存会

萩赤重松囃子保存会は、昭和29年の復活以来伝統芸能の伝承に努めてきた。昭和40年代には他市町村の祭礼にも出演依頼をされたほどで、市内でも萩の尾薬師堂（やくしどう）の縁日や赤堀日吉神社（ひよしじんじや）の祭礼はもとより御伊勢の森（しんめいしや）神明社の祭礼、市産業祭でも活躍していた。今回、保存用ビデオテープ作成に際して、保存会の諸氏には全盛期の技術を取り戻すべく猛稽古をされたということである。現在の保存会の会員は以下の方々である。

氏 名	住 所
清水 元治	武蔵村山市中央3～43～1
高橋 勝雄	〃 中央4～77～1
高橋 清司	〃 中央4～56～1
野村 淳一	〃 中央4～15～1
波多野和夫	〃 中央4～14～2
石井金之進	〃 中央4～11
高橋 利雅	〃 中央3～41～4
関谷 実	〃 中央1～6～1

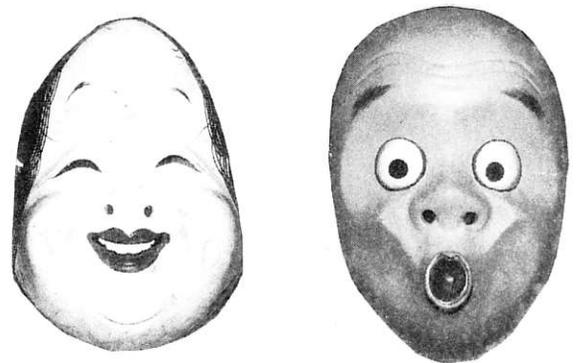


写真3 萩赤重松囃子のバカ面



写真4 保存会の皆さん

武蔵村山市の馬頭観音（2）

1. はじめに

今まで武蔵村山市には24基の馬頭観音が知られており、その全体的な概要については館報第9号（以下前々号という）の誌上で紹介したとおりである。ところが、昨年の武蔵村山市郷土の会の調査により新たに1基の所在が確認され、市内の馬頭観音の総数は25基と

なった。

そこで、市内の1つ1つの馬頭観音を紹介していくうえで参考となるよう前々号に掲載した一覧表の追加分（第1表）と加筆した分布図（第1図）を示し、補足したので御参照いただきたい。

2. 武蔵村山市の馬頭観音造立の推移

25基の馬頭観音のうち、造立年代の明確なものは21基あり、その初出は安永七年（1778年）で、最後は昭和3年（1928年）である。この150年間の造立の推移をみると（第2表）、初期の40年間に年代の明確なもの21基中38%を占める8基が造立されており、比較的集中している。しかし、全体的には大きなばらつきがなく、ほぼ10年間に1～2基と安定した数字になっている。

次に分類別にみると、文字塔の平柱状の形態が圧倒的に多く、しかも年代的にも継続して造立されている。

文字塔でも角柱状のものや馬頭観音の像を刻むものは、双方合せても5基と数量的には多くないが、それらは全て初期の50年間のうちに造立されており、偏りがみられる。

以上のとおり、馬頭観音が造立され始めた初期の段階に比較的造立が栄んで、しかも多様な形態のものが造られていた。それ以降は10年間にほぼ1～2基程度の割合で、文字塔の平柱状のもののみが造立されていたことが伺える。

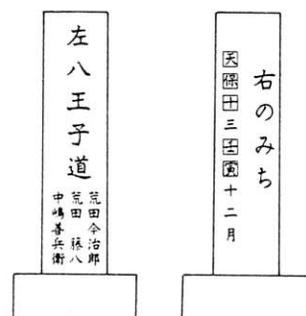
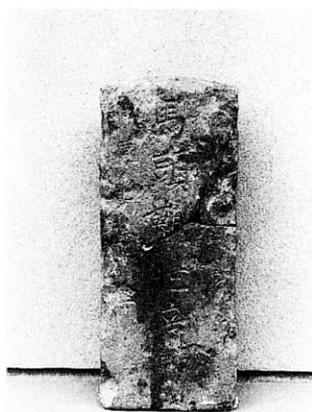
3. 武蔵村山市の馬頭観音

岸・貝塚の馬頭観音（写真1 分布図No.3）

岸、貝塚の都立武蔵村山高校南側の道路の分岐点にあるもので、現在資料館にて修復中である。高さ44cm 正面の幅19cm、奥行き13cmで、頂部が平角型を呈する平柱状のものである。

銘文は正面に「馬頭観世音 天下泰平 国土安全」と彫り、右側面に「右のみち 天保十三壬寅十二月吉日」、左側面に「左八王子道 願主 荒田今治郎 荒田藤八 中嶋善兵衛」とそれぞれ刻まれ、道標をも兼ねていたことが伺える。

写真1 岸・貝塚の馬頭観音



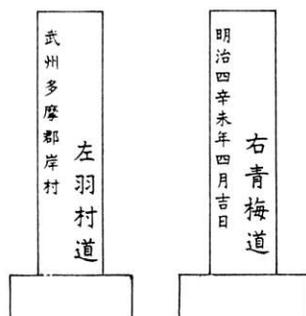
岸・貝塚の馬頭観音（写真2 分布図No.4）

現在は岸、貝塚に建てられているが、本来は江戸街道沿いに建てられていたものである。高さ168cm、正面の幅36cm、奥行き23.5cmで、頂部が皿角型を呈する平柱状のものである。

正面には大きく「馬頭観世音」の文字が彫られている。右側面に「明治四辛未年四月吉日 右青梅道」、左側面に「武州多摩郡岸村 左羽村道」とそれぞれ刻まれ、道標を兼ねていたことが伺える。

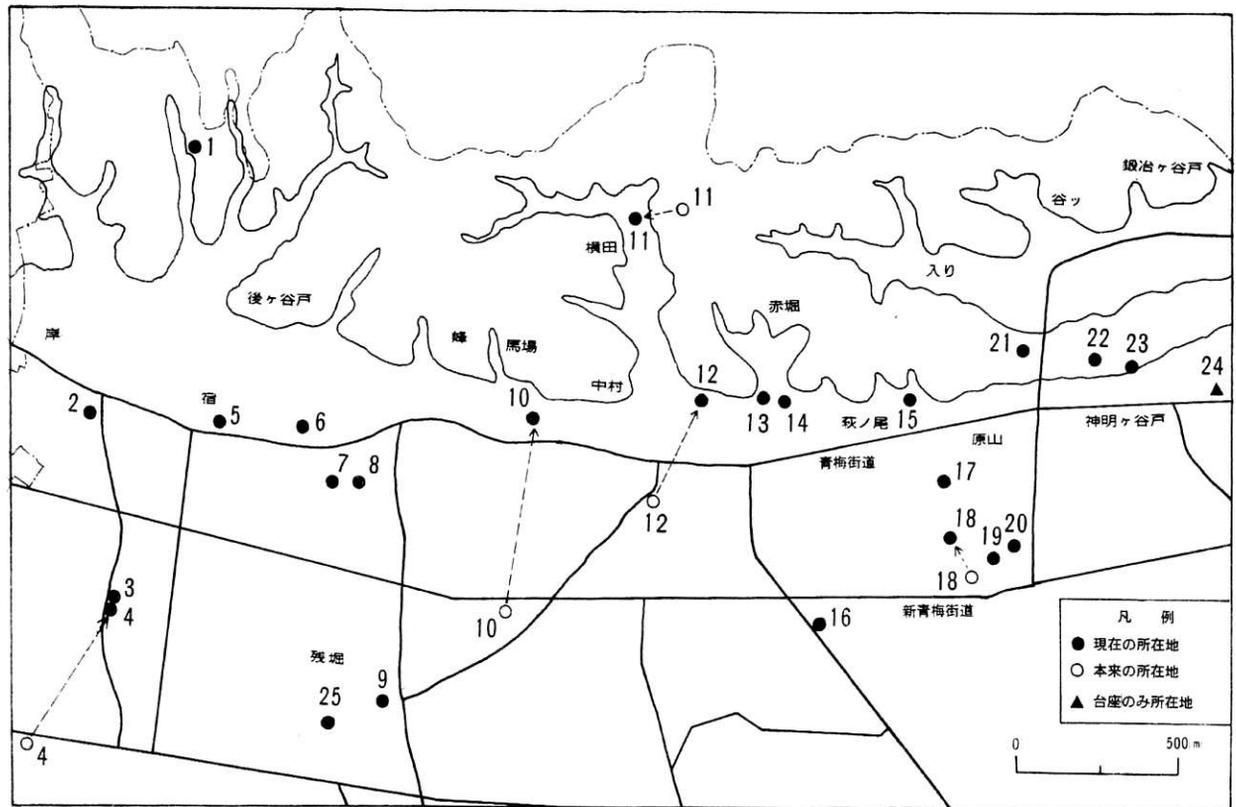


写真2 岸・貝塚の馬頭観音



年 号	分 類	塔 形	分布図番号	備 考
大正元年(1912年)	文字塔	平柱状	25	

第1表 武蔵村山市の馬頭観音(追加)



第1図 武蔵村山市の馬頭観音分布図

造立年代 (10年単位)	基 数	像・文字塔				文 字 塔				形態 不明
		平柱状	角柱状	自然石	不 明	平柱状	角柱状	自然石	不 明	
1771年~	2					2				
81年~	1		1							
91年~	3	1				1	1			
1801年~	2					1	1			
11年~	1		1							
21年~	1									1
31年~	2					1				1
41年~	2					2				
51年~	0									
61年~	2					2				
71年~	1					1				
81年~	1							1		
91年~	0									
1901年~	1					1				
11年~	1					1				
21年~	1					1				
年代不明	4					2				2
合 計	25	1	2	0	0	15	2	1	2	2

第2表 武蔵村山市の馬頭観音の造立推移